

嶋二著 ○又見平家物語

〔承久軍物語〕三山田の二郎重忠は、くひせ川の軍に打まけ、都へ歸り登りつゝ、賀陽院の御所へ参りつゝ、方々の官軍いくさに打まけ、凶徒等都近く攻寄候なり、いかにも御計あるべき由奏し申ければ、上皇○後鳥羽いかゞ思召けん、六月八日○承久三年酉の刻に、日吉の社に御幸なる○中主上○仲も、ひそかに女房輿に召れて行幸なることし、四歳にならせ給ふが、大相國のむすめ、中納言の局と申人相そひ奉る、劔璽は御輿におはします、職事は資頼具實なり、

〔五妻鏡二十五〕承久三年六月八日辛酉、寅刻秀康○藤原有長○筑後左衛門尉乍被疵、命歸洛、去六日、於摩免戸合戰、官軍敗北之由奏聞○中次有御幸于叡山○中主上○仲又密々行幸、被用女房輿職事資頼朝臣、具實朝臣已上直衣劔璽在御輿、中納言局大相國女奉相副云々、主上上皇入御于西坂本梶井御所、

〔皇年代略記後醍醐〕元弘元年八月廿四日、密出帝都、後日幸笠置寺四十月廿九日、重御出奔件寺之間、武士於光明山參會、奉遷宇治平等院、十月二日、入御六波羅六波羅南方爲御所

〔増鏡十五村時雨〕まづ六波羅を御かうじあるべしとて、かねてより宣旨に、たがへりしつはものどもを、まのびてめす○中つゝ、むとすれど事ひろくなり、にければ、武家にもはやうもれ聞て、さこそあなれとよういす、まづ九重をさびしくかため申べしなとさだめけり、かきいふは元弘元年八月廿四日なり、雜務の日なれば、記録所におはしまして、人の争ひ愁る事どもを行ひ暮させ給ひて、人々もまかで、君も本殿にし、ばし打休ませ給へるに、今夜既に武士共きはひ参るべしと忍て奏する人ありければ、取あへず雲の上を出させ給ふ、中宮の御方へ渡らせ給ても、まめやかに、もあらずいとあわたし、兼ておぼしまうけぬには、あらね共、事のさかさなる様になりぬれば、萬うきつゝと我も人もあきれいたりて、内侍所神璽寶劔計をぞ忍びてゐて渡らせ給ふ、上はなまらかなる御直衣奉り、北の對よりやつれたる女車の様にて、忍び出させ給ふ○中日比の